

---

# 短編集

寒桜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

短編集

### 【コード】

N2120T

### 【作者名】

寒桜

### 【あらすじ】

色々な作品の二次創作です。短編、クロスオーバーネタと時折更新していくつもりです。

## 魔導語（前書き）

暇つぶしとして読んでもらえたら光栄です。

## 魔導語

彼、鑢七花はほとほと困っていた。

完成形変体刀12本の破壊、そして尾張幕府八代将軍・家鳴 匡綱の殺害後その部下でもあり自分たちと敵だったはずの否定姫と共に日本全国津々浦々の地図書き道中だったはずだった。

加賀へと向かう野道を歩いていたはずの二人は突然前触れもなく唐突に目の眩む光を浴びた。次の瞬間、七花は途方もない光景を目の当たりにした。

草木は消え、同じような形をした尾張城よりも高いであろう建造物。城下でも見ないであろう人の群れの群れ。

いつも出来事は突然に唐突に起きてしまうが、七花は諦めたように一時期止めていた口癖を改めて自然に口にする。

「 ああ、面倒だ」

面倒とは言ってもそれをそのままにする訳にもいかないという事は今の七花には分かる。

だからまず、七花は何が面倒なのかを探る事にした。

連れがいない。

平然と今の今まで自分の隣を堂々と歩いていた否定姫が姿も形も見つからない。

これは一大事だ。

別に彼女は自分がいなくとも平気でこの見知らぬ所を平気の平左でスイスイと進んでいくだろうが七花には非常にマズイ。

なぜならば二人の財産は全て否定姫が所持しているからである。

七花は勘定が出来ない。それもそのはず彼はほんの一年程前まで俗世とはかけ離れた無人の島で姉と二人で暮らしていたからであった。衣食住。人が生きる術に必要なものは、全て自給自足の生活。そのような暮らしには読み書きも勘定も必要がない。覚えようにも教える人がいないのであった。

とがめとの刀集めの最中に若干は読み書き勘定を習ったが、若干は若干。日常生活で使うには程遠い位置にあった。

結果、金銭面での管理は全て否定姫が行い、財布は常に彼女が持ち歩いてきた。

つまり今の七花は一文無しなのだ。

否定姫を見つけようにも人が多すぎて何処に彼女がいるのか分からない。あの金髪は何処にいても目立つはずなのだが、なぜか自分の周りにいる人間は彼女同じ金髪やら茶色やら派手な髪が多い。そして、七花が彼等を物珍しげに見るのと同じように彼等も七花の事を異色の目で見ていた。

豪華絢爛な十二単を二重に重ね着したような見るからに女物の派手な着物を着た大男。その着物からの覗く四肢には数え切れない程の傷が付いている。

着物なんて珍しいものはミッドチルダに知れ渡ってはいなく、しかも頭二つ程大きな七花は否でも周囲の目を引いてしまう。

七花を見る目は次第に物珍しさから警戒の目に変わる。明らかに男物ではない服を着た傷だらけの大男。管理局に連絡したほうがいいんじゃないかと言う声までもが上がる。

殺気ではないが妙な周りの空気を感じた七花は仕方なしにフラフラと何処へと行くか分からない足取りで歩き始める。

まあ、金がなくとも食い物のあてはある。獣を狩る。雑草を食べる。今は獣も草もないが探せは何所かにそれらしいものはあるだろう。ただそれは面倒以外の何者でもない、だから七花はキョロキョロと辺りを見回し出て来るかもしれない否定姫をついでに探した。

「おう、兄ちゃん。えらく豪華なもん着てんじゃねえか」

「ちよつと俺たちに募金してくんねえ？」

そんな七花の行く手を塞ぐように5人の男が立ちはだかった。

耳にはピアス、服装はダラダラ、見るからにチンピラの彼等は七花の服装から金持ちと踏んだのだろう。ヘラヘラと笑いながら七花に近寄る。

「どこでもこういのはいるんだな」

溜息混じりに七花は関心するように愚痴を零す。それは目の前のチンピラだけではなく自分たちを見ている取り巻きにも言えた事だった。それを余裕と取った一人が七花の胸倉を掴み怒気を上げる。

「ああん！ てめえ、体がデカイからって余裕ぶってんじゃねえぞ！」

「いや、べつに余裕ぶつてるとかじゃなくて」

男は七花が喋り始めると同時にコブシを七花の顔面に入れようとする。握られたコブシは吸い込まれるように七花の目の前まで進んでいた。

入った！ そう男もその後ろの仲間もそして取り巻きも確信する。  
が。

ボキン。

その音は想像していたものとはあまりにも異なっていた。

その音は七花から出たものではなかった。

その音は七花の目の前にいる、今さっき殴ろうとした男の腕から鳴ったものだった。

まるで小枝を折るように容易く、男の腕は折れるはずのない箇所  
で折れ曲がっていた。

「ギ　ギヤアアアアアアアアアア！？」

ようやく自分に起こった現象を理解した男は地面に蹲り、折れた腕を抱えながら奇声を上げる。

折れた！ 俺の腕が！ 何で！？ 一体何が起きた！？

男はまだわけが分からなく混乱する頭でまとまらない考えの海に溺れる。

「ああ、悪い。つい折っちまった」

七花は蹲る男に申し訳ないように侘びる。

折る気はなかった。ただ目の前に来た腕を払うように反射的に出た手刀が思いの他入ってしまった。ただそれだけだった。

残った4人は蹲る仲間を見て顔色を変える。こんな筈じゃなかった。何時ものように力モを見つけ、何時ものように金を巻き上げ、何時ものように遊ぶつもりだった。だがどうだ、目の前の男は顔色を変えずに平気に人の骨を折った。まるでそれが当たり前のように、日常の一環のように簡単に。自分たちは手を出す相手を間違えたんじゃないのか。

そうこう考える間に4人の内の3人が懐からナイフを取り出す。

「ああ 待て！」

一人は出遅れて残った一人。もう一人は七花であった。2人は同時に声を出し、それを無視しナイフを男たちは七花に向け突き出す。

ベキ！

グキ！

ブシャ！

三つのナイフが七花に向いた瞬間、三つの物を壊した音が鳴る。

鑢七花は刀を持たずして相手を斬る無刀の剣士。幼い頃から一本の刀として鍛えられ洗礼されてきた刀だ。

それはたとえ奇策士とがめと旅に出た一年を経ても変わらない。敵を斬り刀を折る。それは本能的にこそあれ必然的にでもあった。

ナイフが七花に向けられた瞬間、七花が考えるよりも先に体が

刀として動いた。剥き出しの刀に人が無造作に触れればその切れ味に己が傷を負う。ただそれだけのことであり、七花の前に折られた腕を庇い蹲っている3人の姿は当然ともいえる絵であった。

取り巻きはあまりの突然の光景にただ自分の目を疑うばかりだった。

が。

この光景を前にしても心を折らない者がいた。

残った一人、名をアークアット・ジンクと言う。

彼は、戦士だった。

今でこそゴロツキの一員であったが、数年前まではストライクアーツの有段者としてそれなりの地位にいたものだった。

彼にストライクアーツの才能は無かった。しかし彼は努力による努力を積み重ね強さを求めた。腕を磨き、体を鍛え、敵を倒した。

しかし、ある試合。相手の卑怯まがいの戦いで右目を負傷。事件へと発展した出来事であった。

それからの彼は負け続けた。全ての努力を経った一瞬の卑怯に押しつぶされ落天した。次第に彼のことは世間の波に消えていった。

そんな何処にでもあるありふれたゴロツキの彼は異常な光景に震えていた。

それは恐怖によるものではなく感動だった。

彼の前に立つ七花の姿は自然体であり、だが普通ではなかった。

絶対的な強さ、目の前の力を力と見ない傲慢までの強さ。自分の目指した力の完成体に巡り合ったような気の高ぶり。

ジンクは自分で考えるよりも、思うよりも先に体が動き構えを取っていた。構えるなんて動作は何年もしていないはずだったが、このときの彼は自然について昨日まで行っていたかのように構える。

戦いたい、そして強さを体感したい。

勝ち負けではなく、試合でもなく、殺し合いでもない、ただの戦



い。

ジंकの中に消えていた強さへの渴望が溢れ出ていた。

「ジंक・アークアット。参る！」

七花は構えを取る男に戸惑っていた。

別に彼は戦う事を拒んではいなく、むしろ興味がなかった。突然現れて勝手に倒れていった。このようなことはとがめとの道中幾らでも合った。とがめを金持ちとして狙ってか、旧日本最強の錆白兵を倒した七花を狙ってか、七花はその都度その都度相手をしていた。今回もそんなようなことであつたがそれが行き成りに変わった。

目の前の男は七花に向けて殺意も敵意も向けてはいない。今まで七花と戦った者たちは多かれ少なかれ敵意やら殺意やらを向けていた。

だからこそ七花は戸惑う。

敵意も殺意も向けずに戦う相手に七花はあまりいい思い出がない。踊山の凍空　こなゆきしかり、奥の百刑場に住む彼我木　輪廻陸しかり、敵意も悪意も殺意もない相手は七花の苦手だつた。

こなゆきは遊びとして、彼我木は戦う気がなく防御として戦つた。戸惑うからこそ七花は次第にジंकが自分に向ける気配が明確に分かりそれにハツと気づく。

(　あ、これあんときのガキと一緒に……)

王刀「鋸」を求め、出羽の将棋村に向かう道中でのことだつた。

ある晴れた日。とがめと七花の前に一人の少年が立ちはだかつた。背は五尺三寸。子供とも大人ともいえぬ半端な年頃の少年は腰の刀を抜き取り七花に向け構える。

「錆白兵を制し、日本最強となつた男。鑢七花とお見受けいたす。

いざ尋常に勝負！」

たどたどしい言葉遣いのこの少年もジंकクと同じ敵意でも殺意でもない感情を持って七花に斬りかかった。

結果は火を見るよりも明らかで、木に寄りかかるように少年を寝かせ、折れた刀を近くに置きとがめと七花は歩みを進める。

「しかし驚いたな」

とがめのその言葉は七花が自分が言うよりも先に少年を殺さずに決着をつけた事だった。今までも殺さないように言い渡してきたが今回は自分が言うよりも先に殺さずにいた。これは七花の進歩ではないかと思うのと自分では七花を扱いきれなくなったのではないかという疑念からだった。

それに対し七花は、

「あのガキ……なんか妙だったんだ。今まで戦ってきた奴とは全然違う雰囲気だし、なんていうか俺に敵意がねえんだ。こなゆきみただけどそうじゃなくてもっと別のなんかが」

「恐らくそれは憧れというものであるう」

「へ？」

「あの子供は七花お前に羨望、畏怖、敬意といった憧れを抱いていたのだから」

そうかお前はそんなものを受けたことがなかったのか、と言いつがめは続ける。

「ああいった年頃にはよくあることだ。日本最強となれば男児なら誰もが一度は願うものらしい。それと戦いたいと思えばすれど実効に移る奴はあまりいないからなというかあまりを過ぎて希少だ、ま

あ覚えておけ七花。この世には敵に羨望をする馬鹿もいると」

話はそこで終わった。あまりにも少なくあまりにも妙な出来事だったので七花も今の今まで忘れていたがようやく思い出した。

（ そうかこいつもそういう奴なんだ ）

七花が記憶の糸を辿るのを知らずジंकは七花の右側面に移動し正拳を七花の顔面に向けて放つ。

しかし七花には関係がない。

刀の七花にはそんなことは関係がない。

人の事情など意味を成さない。

だから、ジंकがいつの間にか管理局の病室に仲間だった奴等と寝かされていたとしても不思議ではなかった。

七花がジंकを倒した後、連絡を受けた管理局職員が丁度その場に居合わせていた。

「ちょっとそこのあなた！ これは一体どういうことですか!？」

七花の周りに倒れる男たちに驚きギンガ・ナカジマは七花に詰め

寄る。

「何って、そっちが突っかかってきたんだけど……」

「それにしてもこれはやり過ぎです！  
ちよっと管理局まできて貰います」

ギンガは自分の所属している陸士108部隊に連絡し倒れている男たちの救護要請を出し、七花を腕を掴み有無を言わず連れて行くこととする。七花はまたのいきなりの事に成すがまま流されるがままに連れられた。

「ふむ、第1は完了したか。これでようやく事が回る」

目の前に展開しているモニターを眺めながら白衣を着た男は満足そうに呟く。

男のいる部屋は機械という機械に占めつくされ、壁や床にはケールが蔦のように散漫していた。

チャラリチャラリと金属の擦れる音が鳴り、一人の男が白衣の男に近づく。

服という服全てが黒。まるで白衣の男と比べるように男の姿は反していた。男は白衣の男が見ていた映像に気づき、笑う。

「ああ、彼が来たのか。歴史の改変者の彼が」

「これで君の要求は叶えたんだ。次は私の研究に協力してもらおうよ」  
「いいさ。君の研究には僕の利益にもなる。                      こんな歪んだ  
世界をぶち壊す為のね」

「刀と子孫の次は    魔女と王。私の実験だ」

「ああ分かっていても。君の娘たちの準備は既に終わったし、レ  
プリカも精製がほぼ済んだ」

「ならば創めようか」

「うん、始めるし終わらせよう」

「「こんなありえない世界を破壊する宴を」」

刀語×魔法少女リリカルなのはStrikers

## 魔導語（後書き）

主人公が一切出てこない……ないですかね？  
感想待ってます。

## バカと馬鹿と銀八先生

それは一本の電話から始まった。

『寺田先生久しぶりです』

「何だアンタかい。珍しいじゃないか、私に電話をよこすなんて」  
『実は折り入って相談したい事が…』

・  
・  
・  
・

「いいさ、面白そうじゃないかい。丁度ウチにはバカのクラスには打って付けのバカな教師がいるよ。あのハゲ校長はアタシが何とかしてやるさ」

『ありがとうございます』

「なに、昔の教え子からの頼みなんだ。無碍には出来ないからね」

『ところで、その教師の名前は？』

「坂田 銀八。死んだ魚のような目をしたヤツさ」

「学園長、本気ですか!？」

「本気も本気さね。Fクラスをまとめる事の出来る教師なんて、西村先生以外この学園にはいないからね」

蠢く策略。

「つてことでのな坂田先生。私としてはどおおおおつしよつも無く、どおおおおつしよつも無く不眠なんじゃが　　つて話聞いてる?」

「聞いてますよ工場長」

「いや、ワシ校長だからね?　……まあいい。君には来週から文月学園に代理教師として行って貰う。異論は無いいね?」

「パス」

「いやコレゲームとかの軽いモンじゃないからね。マジで今回はそんなの聞けないから」

やる気の無い教師。

「そう言えば雄二。鉄人の代わりに来る教師つてどんな人?　たしか代表は先に顔合わせしたんだよね?」

「安心しろ明久。お前よりは賢そうだ」

「おのれ雄二!　それつて僕がすつごくバカみたしじゃないか!」

「落ち着け明久。今のは嘘だ。来る教師はお前並みのバカだ」

「そんなにバカじゃあ教師なんて出来る訳ないじゃないか!」

「自分がバカなのは自覚しておるんじゃないか……」

史上最低のFクラス。

「アンタが寺田先生が言つてた坂田先生かい?　確かに目が死んでるねえ」

「大丈夫つすよババア。いざとなつたら煌くんで」

「学園長失礼します」

「おや来たね」



「私の代わりにFクラスの担任になる教師が見つかったそうですが……」

「ああ。その銀髪の男さね」

「銀髪？……お前、銀八かつ！？」

「あん？ あー、えっと、大西君？ おー、すっかり大きくなつてあの神父の時は大変だったな」

「誰だ大西って！？ 俺だ！ 高校の時一緒だった西村だ！」

別にいらぬ真実。

「あの……良かったら今度お料理教えて貰えませんか？」

「ええ良いわよ？ 私で良かったらいつでも」

「おい、ヤベエーぞ。破壊神と卵破壊者がタッグを組みやがった」

「ムツツリー二君。あなたそこそ保健体育の成績が良いからって保健委員の座を狙っているようね？」

「……………っ！（ブンブンブン）」

「いや、別に保健体育の成績で決めてるんじゃないからね保健委員は」

「なっ、なんですの貴方は！？ 美春は貴方みたいな豚野郎に構っている暇はなんです！ 早くお姉さまの所にいかなくては！」

「おーおー、いるじゃねえか生意気なメス豚が」

「だいじょーぶネ、ペツタン。世の中胸だけが全てじゃねーヨ。ワタシの国の格言に『貧乳はステータス、無乳はノーブラしても気付

「かれない』ってアルネ」

「それって慰めてないわよね！？ てゆうか今ペツタンって言ったわね！ これでもBはあるのよ！」

「寄せた胸なんて胸じゃないネ、ニセ乳アル。現実を見るヨ、ワタシとそんなに変わらないネ」

「桂君、その長髪は学園じゃあ校則違反と何度言ったらわかるんですか？」

「しかしだな先生！ この髪は地毛であって取り外しが出来る物では……」

「髪を切りなさいと言っているんです……！」

「僕は男だ！」

「キューちゃんまたそんなこと言って」

「ワシも女ではない男じゃ……！」

「僕も女ではない男だ……！」

「そんなこと言ってないで逃げちゃダメよ。行きましょキューちゃん、木ノ下君」

「そうよ往生が悪いわよ木下」

甘苦い青春の日々。

「来週から、私に変わってFクラスの担任をする坂田銀八先生だ」「どーもー、坂田銀八です。特技は目を開けたまま寝る事なんですよしくー」

《バカと馬鹿と銀八先生》

「あの教師に任せて大丈夫なんですか？」

「まあ、なるようになるんじゃないかね」

恋姫無双 メンマ伝 く黒き月夜に華蝶仮面は啼くく

浦原商店。

それは老若男女、小さなお子さんから大きな子供。はたまた穢れを知らない少女から暇を持って余す熟女とありとあらゆる人物が訪れる摩訶不思議な店。

そんな浦原商店の倉庫はありとあらゆる在庫の山々。

年末の大掃除には従業員の雨やジン太が行方不明になりかけるらしい。

それほどまでに浦原商店の倉庫は大きい。

もつどうやったら小さい商店にここまでデカイ倉庫が出来て、こんなに物が置けるんだって程に巨大だ。

そんな膨大な倉庫の中を一人の少年が駆け回る。

名を黒崎一護。

オレンジ色の髪が特徴の高校生。

そして倉庫内を駆けずり回る少年を帽子を被った男が見ていた。

「あ、黒崎サン。それは向うの三番のところに」

「おう」

「その小さなビンは奥の七の棚に置いてください」

「分かった」

「その黄色い箱は」

「うおっ!?! 何か唸り声上げてんぞ!?!」

「呪われるんで捨てちゃってください」

などと、一護にテキパキと支持している。

帽子を被った男こそこの摩訶不思議不可能有限可能な店の店長、

浦原喜助であった。

「だああああ！ 何で俺がこんな事しなくちゃいけねえんだ！」

「文句言わないでくださいよ黒崎サン。あなたが勉強部屋を使わせて欲しいっていうから使わせるその代わりに倉庫の整理をしてるんじゃないですか」

「夏ん時はそんなもん無かったじゃねえか！」

「ですから、夏のレスン分もこれに含まれているんですよ？」

「ち、ちくしよおおおおおおお！」

「ほらほら、口ではなく手を動かしてください。日が暮れてしましますよ？」

一護に向かって扇を仰ぎ催促を促す。

もはやグウ音も出ない一護は黙々と作業に戻る。

そこにぬつと、一人の男が倉庫に入ってきて来る。

「テッサイサン、どうかしましたか？」

「少しばかり店長に確認して欲しい物品がありました」

「分かりました。と、いう訳で黒崎サン。私は少しばかり抜けませんが、サボっては駄目っすよ？」

浦原は一護に釘を刺し、テッサイと倉庫から出て行く。

「ふー、ちくしよーあの変態店長め。朝からコキ使いやがって」

浦原が去った瞬間、一護はその場に腰を下ろし休む。

腕を回しゴキゴキと嫌な音が関節から鳴る。

どうやら長時間の労働だったらしい。

「しっかし……見たこともねえモンばっかだなー」

一護は倉庫を見渡し誰に聞かせるでもなくそう呟く。  
古い雑誌、何か液体の入ったビン、マネキンに銅像らしきもの  
である。

学校の理科室にあるようなフラスコの中には紫じみた濃い液体が  
浸され中に何かが入っているらしい。

そのとき、カランと倉庫の中を乾いた小さな音が響いた。

音のした方を見るとそこには何やら複雑な模様の描かれた、平た  
く円状の物が落ちていた。

倉庫を掃除しているときにあんな物あったか？と考えながら一護  
は腰を上げそれを拾い上げる。

「鏡、か……」

よくよく見ればそれは古めかしい歴史の教科書で拝見するような  
鏡だった。

何故こんなものがここにあるのかと思うが、ここには得体の知れ  
ないものが多すぎる。

ならば鏡の一つや百つあっても何も不思議ではない。

浦原が戻ったらコイツの置き場所を聞くかと、近くにあったダン  
ボールの上に置こうとした瞬間、鏡はまるで自分の意思であるかの  
ようにスルリと一護の手から抜け落ち、ガシャン！と盛大な音を立  
て碎けた。

「あ……」

一護は数秒その場で固まり、頭の中を色々な思考が巡る。

どうする。黙っているか。バレたら又何か面倒な事をコレを理由  
に……最悪の事態を回避しようと取り合えず割れた鏡を処理しよ  
うと考えたその時、

割れた鏡が眩い光を放ち倉庫を白く照らす。

「うおっ!？」

一護は突然の輝きに耐え切れなく咄嗟に目を瞑る。

全てを白く染めた光は次第に止み完全に消え失せた瞬間、倉庫に一護の姿は無かった。

カランカランと浦原の下駄の鳴る音が近づいていた。

光が止み目を開けた時、一護の立っていた場所は林の中だった。

「……は？」

今まで自分がいた場所とはあまりにも違う場所に気の抜けた声しか出せずにいると、ガサガサと草むらの中から三人の男が出てくる。

「おう、にーちゃん良いもん着てんじゃねえか。命が惜しかったらそのでけえ刀と着物をとつと脱ぎな」

三人の中で一番小柄な男が一護に持っていた剣を向けそう言う。でけえ刀?一護は小男に自分の格好を言われ己を見直す。

確かに自分の姿は黒い着物に背には斬月を背負っており、いつの間にか自分は死神化していた。

「……何で？」

一護は自分の格好に疑問を持ったが相手は自分達に言ったのだと勘違いし額に青筋をたてる。

「てめえ、自分がどういふ状況だか分かってんのか! ああん!」

「大人しくしないとアニキの刀がお前を串刺しにするんだな」

一味のリーダーらしき男と大柄で肥えた男が一護に迫る。

フーと一護は息を吐き、自分の事を考える前に目の前の奴等を片付けた方がよいのだらうと結論付け、斬月に手を掛けようとした時、

「待たれい!!」

透き通った綺麗な声がその場を支配する。

「な、何だ!？」

「何処から聞こえたんだな!？」

「す、姿を見せるオイ!？」

三人は慌てて周りを見渡し刀を構える。

一護も三人につられて声の主を探し林の中を見渡すが誰もいない。

「ふふふ、何処を見ている。上だあ!!」

四人が一齐に上を見ると、そこには木の上に一人の女性が立っていた。

水色の透き通った髪にやけに袖が長く丈の短い白い着物、また手には壺と槍。

そして何より、

「……仮面?」

悪趣味などこその好色な奴が着けていそうな変な仮面を着けていた。

また胡散臭そうな奴が増えたと思っていたのは一護だけらしく、



三人はこの仮面女を知っているようで体を小刻みに震わせていた。

「て、てめえはまさか!？」

「「「か、華蝶仮面!」「」」

何だそのどこぞのライダーらしき名は、と口には出さずに一護はツッコム。

木の上の仮面女は三人の驚く顔に満足げに頷き、声高々に言い放つ。

「その通り!! 乱世を正すため地上に舞い降りた一匹の蝶、美と正義の使者! 華蝶仮面! 推参!」

バーンと効果音やら背後から煙が出そつな台詞を言い、地に着地する華蝶仮面。

「一人に多勢とはあまりにも卑怯。悪いが手を出させて貰う。少年よ、少しの間この壺を預かっていてくれ」

一護に壺を渡し、華蝶仮面は三人との距離を一気に詰める。

初めに巨漢の男の腹を突き、残った二人の顎を槍の石突きで穿つ。その間まさに一瞬の出来事だった。

流れるようなまさに蝶の舞のように攻撃がただの動作のようにも見えた。

三人は何もすることも出来ずに地面に崩れ落ちる。

「ふん、他愛も無い」

華蝶仮面は槍を払い一護に近づく、そのとき打ち所が浅かったのかリーダー格の男がよろりと立ち上がり後ろを向いた華蝶仮面に向



「お、落ち着け！ んなもん食つたら腹壊すぞ！？」  
「メンマを食べて腹を下すなら本望だっ！！！！」

羽交い絞めにし何とかメンマを食べるのを阻止した一護だったが、華蝶仮面はまだ未練がましく地に着いたメンマを見ている。

「くっ……これというのもお主が私のメンマ壺をブン投げたりするからだぞ！！！」

「あん時はああするしかなかったんだから仕様が無えじゃねえか」

「いや、何か方法があつたはずだ！ 例えばお主がメンマの身代わり  
に敵にぶつかるとか！」

「自分が助けようとした奴を殺すきか！？ ……あー分かった、弁償すりゃあいんだるそのメンマ」

「私のメンマをそう易々と弁償できるか戯け！！！」

「ぐっ（メンマごときに）……じゃあどうすりゃあいんだよ」

「うむ……よしっ！！！」

若干考え、華蝶仮面は閃く。

「お主、私のメンマ作りの旅に手を貸せ」

《恋姫無双 メンマ伝 〱黒き月夜に華蝶仮面は啼く〱》

星「お楽しみに！」

一護「始まるか！ んなモン！！！」

星「何を！ 歴史に残る大作だぞ！！！」

一護「迷作の間違いじゃねえか！！！」

アスナ「私の出番〜！」  
ネギ「ではまた〜」

星「まさかあの局面で一護がメンマを庇うとは……」  
一護「意味あり気に変な事言ってるじゃねえ！」

IS インフィニット・ストラトス × BLEACH (前書き)

ネタですが最後まで読んでくださったら幸いです。

空がある。

青く澄み渡った空が広がっている。空の色に染まるかのように白い雲が散りばめられ、その下には枯れ果てた山岳部が連なる。

荒野。

荒れた大地が広がる地上。

大地に風が吹かれた。

風は強さを増し、大地をめくり雲を消し去った。

暴風と化した風が大地を襲い、空へと貫く巨躯な柱があった。

空は赤く染まり荒野を照らす。

数秒、柱が消えると、赤く染まった空と地上は元の色を取り戻し、また静寂が世界に広がる。

柱が消えた場所には穴があった。

穴。

あまりにも深く、あまりにも巨大な穴は何もない虚空を広からせる。

虚空には二つのものがあった。

一つは白だ。全ての物を染め、全ての存在の頂点に君臨する為に全ての物を犠牲にした白。名を藍染惣右助。大罪の死神。崩玉によって創られた破面を引き入れ、霊王を抹殺へと向かった彼は死神と、――一人の死神代行によってその道を砕かれつつあった。

そしてもう一つは、黒だ。白と相対するように全てを呑み込む黒。その色は深く、穴のように底を見せない。彼の名は黒崎一護。

特徴的な茜色の髪は黒く染まり、短髪だった長さは女性のように腰まで伸びていた。

白は叫ぶ。

己の上を行く力を持つ者を、超越者として存在する自分を更に超えている者を。

その姿はまるで幼子のようであった。自分の力では適わない事を認めず、駄々をこねるように。

黒は何も言わない。

ただただ目の前の敵を見詰めたまま、右腕でを振り上げた。

この戦いに終止符を討つために。仲間の元に返る為に。

「……無月」

振り下ろされた右腕から膨大な月牙が放たれる。それは月牙であり、黒崎一護でもあった。彼の霊圧の全てを含んだ月牙は大地を斬り、空をも斬り裂く。

光さえも月牙は呑み込み、世界は夜の闇を生み出した。

圧倒的。

白は黒に呑まれ、その身を裂かれる。彼の胸。心を失った虚を彷彿とさせるその孔の中心部には彼を主と認めた意志を持つ物質、崩玉があった。

崩玉は、たとえ主の身が裂かれ崩れ落ちようともそれは未だに存在し続けた。

超高濃度の霊圧の中であろうと崩玉は、主を失った崩玉は無抵抗のまま月牙を受けていた。

拮抗かのように見えた状態は唐突に終わりを迎える。

硬質な岩を砕いたような鈍い音が崩玉から発しられ、全身を亀裂が走る。

……終わった。

崩玉の崩れ行く末を見た一護はそう心の中で呟いた。  
終わり。

それは彼等の勝利でもあり、友との別れでもあった。

誰よりも近くで共に戦い、誰よりも分かり合えた魂の分身。そ

れは無月を放った代償であり、自らが選んだ選択だった。しかし、だからといって納得のいえる結末ではない。

それは斬月も同じだった。

誰よりも一護を護る為に、彼に刃を向け闘った。だがそれでも彼は退かなかった。己の世界が水の下に沈もうと、歩みを止めた足をまた踏み出し前へと進めた。その姿こそが斬月の知っている黒崎一護であった。

だからこれでいい。

薄れ崩れ行く中、斬月はそう想った。これから一護と共に戦うことは出来ずとも、今彼を護ることができた。

だからいい。

これからは闘いを忘れ、霊を忘れ、己を忘れ、平穩に生きて欲しい。

そう斬月は祈り、

――願ってしまった。

崩玉は崩れる中、その願いを見つけた。

『崩玉』とは願いを導く能力。

それは対象者自身の実力によって作用する。藍染はその力を使い彼は超越者へとなった。

――ならば、既に超越者として存在を超えた彼や斬月ならばその力はどこまで昇るのだろうか。

己を破壊した者への敬意か報復か、崩玉は斬月の願いを導いた。



月牙が止み、大地には深々と遙か彼方まで伸びる傷跡以外、何もなかった……

7月15日。

奇しくも偶然か、黒崎一護という存在がまた生まれ出た日だった。

世界は穏やかだった。

黒崎一護。

黒崎家の長男であり、兄。下に双子の姉妹、遊子と夏梨を持ち両親と合わせて五人家族のどこにでもいるありふれた家族だった。

勿論、幽霊など見えない普通の子供だ。

普通に友達と遊び、喧嘩をし、泣き、笑う。そんなどこにでもいるありふれた子供だ。

世界は平穏だった。

篠ノ之束がIS インフィニット・ストラトス を開発するまでは。

IS インフィニット・ストラトス × BLEACH (後書き)

この話に限らず、好評だった物は続きを書いてみようと思います！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2120t/>

---

短編集

2011年11月16日22時22分発行